

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 朴 智娟

論文題目 オノマトペの言語的統合性に関する日韓対照研究

### 論文審査担当者

主 査	名古屋大学准教授	秋田 喜美
委 員	名古屋大学教授	堀江 薫
委 員	名古屋大学教授	杉村 泰

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の意義】

本博士論文は、日本語と韓国語のオノマトペ（擬音語、擬態語）が両言語の体系にどのように組み込まれているかという「統合性」（system integration）の問題を、多角的な視点から論じたものである。その視点とは、オノマトペの意味の具体性、意味拡張、レジスターの影響、語形の非慣習性の4つである。本論文の主たる成果は以下の2点にまとめられる。

- (i) 日韓両言語において、オノマトペの文法的統合性（形態統語的統合性；述語形式としての実現可能性ないし出現頻度）は、表す意味の具体性、メタファー拡張の可能性、口語性、語形の慣習性と相関する。
- (ii) 日本語よりも韓国語のほうが、総じてオノマトペの文法的・語彙的統合性が高い。

いずれの点についても、主に辞書やコーパスを徹底的に調べ上げることで、実証的な議論を展開している。また、個別言語における記述的研究が大半を占めるオノマトペ研究において、言語類型論的研究をある程度踏まえた本研究は、日韓対照言語学だけでなく言語類型論に対しても有意義な知見を提供しているといえる。具体的には、従来、漠然と論じられがちであった「統合性」という概念を、オノマトペの構文的特徴から明確に定義し、それと相関する複数の形式的・機能的特徴を提示することに成功している。

### 【本論文の概要】

本博士論文の内容は以下の通りである。

#### 第1章：序章

本章では、日韓オノマトペの言語構造への統合性という本論文のテーマを提示し、その議論の出発点として「写実モード／記述モード」（depictive/descriptive mode）という記号論的区別を導入するとともに、オノマトペの統合性に関する近年の研究を要約している。

#### 第2章：基本概念

本章では、オノマトペを議論する上で必要となる基本概念を導入している。オノマトペという語類については、国内外における先行研究の定義を援用している。具体的には、オノマトペらしさに段階性を認めるプロトタイプの観点を採用し、また、その範疇は境界が不明瞭であるとしている。オノマトペの意味分類についても、擬音語・擬態語・擬情語という一般的な三分法を採用している。加えて、類像性や音象徴といった概念を、日韓オノマトペを例にまとめている。

### 第 3 章：オノマトペの動詞化に関わる複数の意味素性

オノマトペの統語的実現については、近年いくつかの通言語的一般化が提案されているが、いずれも問題を抱えている。本章では、日韓オノマトペの動詞化に着目し、その様相が聴覚性、継続性、他動性、評価性という 4 つの素性で記述できることを指摘している。これらの素性は、両言語である程度共有されつつも、その優先順位は異なっていることから、オノマトペの文法的振る舞いの普遍性と言語個別性が窺われる。

### 第 4 章：オノマトペの統語分布の全体像

本章では、日韓オノマトペの統語的実現を副詞用法や形容詞用法まで広げて論じている。「意味的特定性」（意味の具体性）という尺度を導入することで、日韓両言語とも、それが非常に高いオノマトペ（例：摂食を含意する「ぱくぱく（\*する）」や *akwiakwi(\*-kelita)*）および非常に低いオノマトペ（例：頻度を表す「ちよくちよく（\*する）」や程度を表す *kkopakkkopak(\*-kelita)*（きちんと））は動詞化を拒み副詞として実現する、という一般化を提案している。第 3 章で見た動詞化可能なオノマトペは、意味的特定性が中間程度のもの（例：歩行様態にもその場でのふらつきにも使える「ふらふら（する）」や *pithulpithul(-kelita)*）ということになる。

一方で、オノマトペの動詞化・形容詞化は日本語よりも韓国語のほうが広範に及んでいる。さらに、韓国語のオノマトペは、副詞用法ですら動詞と強い共起を示し、そのコロケーション自体がメタファー拡張することも少なくない。中でも、*Kimchi-ka ip-ey ccakccak pwuth-nun-ta*（キムチが非常に口に合う（直訳：キムチが口にペタペタくつつく））のように慣用句化した「オノマトペ副詞+動詞」の例からは、韓国語オノマトペの述語への統合性の高さに加えて、その語彙体系への統合性の高さが窺われる。

### 第 5 章：オノマトペの口語性と統合性の相関関係

本章は複数のコーパスを用い、日韓オノマトペがどのくらいの割合で述語の一部として使用されているのかという言語実態を調査している。結果としては、日韓ともに、擬音語よりも擬態語のほうが高い述語化率を示した。これは、先行研究で提案されている類像性による一般化を支持する結果である。また、書き言葉のコーパスよりも話し言葉のコーパスのほうが、オノマトペの述語化率が高かった。これは、話し言葉というレジスターが、述語化に関わる諸制約を緩和するためと考えられる。この傾向は、とりわけ日本語の「オノマトペ+する」に強く見られるという。

### 第 6 章：オノマトペの非慣習性と統合性の相関関係

本章では、第 5 章の話し言葉データを、語形の慣習性という観点からさらに分析している。日韓とも話し言葉では、オノマトペが母音延長（例：きゅーん、*ccwaak*（ずらーっ））や部分

重複（例：ぱぱっ、*pwulululu*（ぶるるるっ））などの表出的（*expressive*）な語形を取りやすい。こうした写実性の高い語形は、文法的統合性が低い非述語用法においてとりわけ多いことが知られている。本調査でも、日韓オノマトペは同様の結果を見せた。加えて、新奇な音使いのオノマトペ（例：ごにゃごにゃ、*emwulttengemwultteng*（あやふや））についても、同様の統合性との相関が得られるかを検証しているが、これについては韓国語において有意傾向が得られたのみであった。

## 第7章：結論

本章では、本論文で得られたオノマトペの文法的統合性と意味的特定性、メタファー拡張可能性、口語性、表出性の相関をまとめるとともに、その観察の中で得られた「日本語よりも韓国語のほうがオノマトペの統合性が高い」という結果を追究している。まず、韓国語におけるオノマトペの慣用句化を再度観察し、また、オノマトペのような一般語である色彩語や味覚・嗅覚語の豊富さに触れることで、韓国語の語彙体系におけるオノマトペの高い統合性を指摘している。次に、統合性の言語差を生む要因について、言語進化論、統語類型論、表現構造の類型論、意味類型論といった多様な観点より仮説を提示し、本論文を締め括っている。

### 【審査委員会による審議および合否判定】

口述試験では、まず申請者から博士論文の各章について要約がなされ、その上で各審査委員から細部に渡る質問・コメントがなされた。その結果、本論文は発展の余地を残しつつも、日韓対照研究あるいはオノマトペ研究に留まらない一般的な意義を有するという点において、審査委員会で意見の一致を見た。また、質疑や指摘への対応についても、申請者の真摯な姿勢が評価された。

本論文は、総合的に見て、博士後期課程の学位論文としての基準を十分に満たしていると、審査委員会の全員一致で結論づけた。よって、本論文を合格と判定した。